PRINCESS PRINCESS

吉例 謹賀新年 プリンセス・プリンセス'94

思い込んだら、質実剛健。

at日本武道館

プリンセス²の日本武道館を見なければ年が明けた気がしない、という声が聞かれるほど、すっかり恒例となったお正月公演。今回は貫禄さえ感じさせる、成熟度の高い、充実のステージとなった。1月3日のコンサート速報！

撮影●岩岡吾郎　文●海老根祐子

<M E N U>
質実剛健の序曲(SE)
Dear(SE)
POWER
GO AWAY BOY
夕陽がよんでいる
晴れた日に
世界でいちばん熱い夏
19 GROWING UP-Ode to my buddy-
MELODY MELODY
SEVEN YEARS AFTER
M
瞳だけはみつめない
ロマンス
ふたりが終わる時
GLASS HEAVEN
ROCK ME
パイロットになりたくて
GUITAR MAN
OH YEAH!
Diamonds
さよならダーリン(EN)
傷跡(EN)

PRINCESS PRINCESS

吉例 謹賀新年 プリンセス・プリンセス'94
思い込んだら、質実剛健。
at日本武道館

〝吉例・謹賀新年 プリンセス² '94〟——プリ²のお正月は、今年も武道館から始まった。しかも今回は、1月2、3、6、7、16日の5日間公演。お正月気分真っ只中の1月3日、武道館へと足を運んだ。そこで見たものは——バンド結成から11年。その年月の中で、5人それぞれが、ミュージシャンとして、ひとりの女性として、大地の感触を素足で確かめながら歩いてきたであろう、安定感とスケールの大きさだった。〝思い込んだら、質実剛健〟。そんなテーマどおりのプリ²を感じさせるステージだった。

今回は、ステージアドバイザーに、これまでプリ²のCFなどを手がけてきた長尾直樹氏を迎え入れ、いちだんと演出もグレードアップ。特にビジュアル面でいろいろな試みがなされた。ロシアの古びたファクトリーをイメージしたという重量感のあるセット。いぶし銀のファクトリーに、シックでゴージャスな黒い衣装が映える。さらに、バックにはスクリーンを設置、ファクトリーとは対極をなすポップなCGアートが投影される。長尾氏が、今回の演出について、こう話していた。

「長いキャリアを持つ彼女たちのスケール感や重厚感をカタチにしたかった。だから、重々しく力強いイメージのある工場をモチーフとして登場させました。CGアートはプリ²独特の音楽の色合いを視覚で訴えるというところでの起用。メンバーみんな、いい意味で年をとって、もう〝女の子〟というより〝女〟。たとえば、目尻のシワにも味がある(笑)、噛めば噛むほど味が出る、彼女たちのキャラクターを表現したかったんです」

もはや、楽しくてハジけているだけではない、けれど、大上段に構えてカリスマを気取るわけでもない。プリ²の〝質実剛健さ〟がいたるところにアピールされていたように思う。

オープニング「Dear」がSEで流れ、アッコちゃん、キョンちゃん、加奈ちゃん、登茂ちゃんが両サイドに分かれてエレベーターから登場。そして、センターのせりから香ちゃんが現われる。荘厳で劇的なプロローグだ。

1曲目「POWER」、ですでに会場のテンションは沸騰点に到達。大仕掛けなセットや照明……そんな演出も、あくまでプリ²の〝ライブ〟のバックアップにすぎないことを証明するような、パワーに満ちた幕開けだった。

「夕陽がよんでいる」、続くバラード「晴れた日に」で、ひと呼吸。真冬のを一瞬にして常夏に変える「世界でいちばん熱い夏」、ドラマティックな「SEVEN YEARS AFTER」まで、前半をたたみかけるようなスピードで押しまくる。視点をどこに定めたらいいのかわからないほど、階段を上り、ステージの端から端まで駆け抜け、2階席のいちばん奥にまで向けて挑発する香ちゃん。加奈ちゃんとアッコちゃんも負けずと走り回ってアピールする。

さて、ここで小休止。上がりっぱなしのテンションを冷却するように、ステージ中央にイスが用意され、メンバー全員そろってのMCが始まる。

「せっかくだから、5人で話をしようと思うんだけど……。何しゃべろうか？　うーん、じゃあ、アッコちゃんから。きのうの夕飯は何食べたの？」

「肉」

「肉って何？」

「ヒレ」

「こういう場合、ふつう、ステーキとか焼肉とかって答えるよね～(笑)」

相変わらずの大ボケぶりを発揮するアッコちゃんに会場中が爆笑の渦になったことは言うまでもない……。

そして、香ちゃんを司会役にメンバーひとりひとりが今年の抱負を語るという年頭ならではのMCが始まった。登茂ちゃんのソロ・アルバムリリースや映画主演、キョンちゃんの詩集出版など進行中のものから、香ちゃん、加奈ちゃん、アッコちゃんの〝創作活動に励んでゆくゆくはソロ・アルバムへ……〟という準備段階のものまで、さまざまな近況が報告された。

ただし、ソロ活動が増えるといっても〝プリ²の活動の合間を縫って行なうものだから、プリ²としてのツアーもあるし、リリースもある。ソロ活動からプリ²に大きなお土産を持って帰れれば〟というものだそう。メンバー同士の不仲説や解散説という噂も笑い話に変える、余裕の笑顔を見せてくれた。

MCの間、5人はふつうの女の子のようだった。どこにでもいる仲よしグループみたいに。しかし、ステージに立ち、何万人を熱狂させる彼女たちは、ふつうの女の子でなくなる。スタートはふつうであったかもしれない。が、10年間を大きく超える時間、音楽を愛し、取り組み続けてきた5人は、すでに〝ふつう〟ではありえないし、選ばれた人であるに違いない。

中盤戦。スクリーンにはしんしんと降り積もる雪景色が映し出される。珠玉のバラード「M」でスタートだ。ともすると、進行がダレてしまう時間帯でもあるが、プリ²は飽きさせない。加奈ちゃんのギターが情熱的にうねる「瞳だけはみつめない」、香ちゃんがピアノの弾き語りで綴る「ふたりが終わる時」……。楽曲のよさもある。だが、それだけではない。メンバー間の張りつめた空気、そして香ちゃんの圧倒的な存在感に引きずり込まれ、どっしりした音の波に飲まれ、心を傾けずにはいられなくなる。

もはやプリ²は、〝女の子ながら〟という女性バンドに使われがちな形容詞がそぐわないバンドなのだ。男性のバンドと区別するとしたら、その表現が、〝カッコイイ女性たち〟という言い方になることぐらいかもしれない。そんなことを実感した。

「GLASS HEAVEN」が、後半へのホイッスル。香ちゃんが真紅のスカートをひるがえし、舞踊家さながらの激しいダンスを踊る。あとは、盛り上がりコースをいくのみ。「OH YEAH!」「Diamonds」とヒット曲で飛ばし、幕は下りた。いまでは当然のことになってしまったけれど、会場の人ほとんど全員がこれらの楽曲を歌えるというその事実に改めて驚かされた。時間の流れに色あせてしまわない、スタンダードを目指したいと言っていた彼女たちは、まさにその道を歩み出しているのだ。

アンコール。ライブでは初公開、最新アルバム「MAJESTIC」から「さよならダーリン」と「傷跡」。5人は、力強い拍手に見送られてゆっくりとステージから消えていった。会場を埋め尽くしていた人々の胸に最後に残ったものは何だったのだろうか。ラスト・ナンバーの余韻だけではない。94年、きっと幸せになれる、そんな確信にも似たエネルギーだったはずだ。

とてもタイトで、メリハリの利いたコンサートだった。余分なものがそぎ落とされて、これからのプリ²の核心が見えてきた、94年のスタートにふさわしい〝MAJESTIC〟なステージだった。